

---

# バカと天才？たちと召喚獣

SHIN.

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと天才?たちと召喚獣

### 【NZコード】

N1068Z

### 【作者名】

SHIN.

### 【あらすじ】

科学とオカルトと偶然によって開発された「試験召喚システム」を試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こした文月学園。そこに一年の振り分け試験直前に転校してきた7人の天才?とFクラスのバカたちとAクラスの優等生たちが繰り広げる学園物語です。この作品が処女作ですので駄文+亀更新になるかも知れませんがそれでもよければ読んでください。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、SHIZU・と申します。

文才もなく、駄文になるかもしれません、よろしくお願いします。

## プロローグ

振り分け試験日

明久 side

時刻8時55分

「おはよーございます鉄・・・西村先生！」

鉄人「吉井、遅刻・・・なぜそんなにボロボロなんだ？」

「いやーくる途中にチンピラに絡まれてる女の子を助けてたら遅れちゃつて～」

鉄人「くだらん[冗談はいいから早く服を着替えて試験会場に行け（まつたくこのバカは・・・）」

「はーい！」

僕は校門前で鉄人に挨拶してから、更衣室で体操服に着替えてから試験会場へ向かった。

「おはよー雄二ー」

雄二「ん? 遅かつたなバカ久」

明久「来て早々人を罵倒しないでよ！僕はバカじゃないしー雄二も大差ないじゃないか！」

康太「・・・振り分け試験の日に遅刻する奴なんてバカしかいない」

島田「仕方ないわよ、吉井はバカなんだし」「みんな酷い！これにはひじょに深い訳が・・・」

秀吉「まさか振り分け試験のときに遅刻とはのう・・・」「だからちがうつてば！」

雄二「なら何故遅刻したんだ？」

「それには深い事情があつて・・・」

雄二・秀吉・康太・島田「――（・・・）寝坊（だな！）（じや

な！）（ね！）」「」

「待つて！まだ何もいつてないよね！？」

大島先生「次の教科の試験始めるから全員席に着けよー」

振り分け試験終了後

「これならCクラスくらいいけたんじゃないかな？」

雄二「安心しろ明久、お前はFクラスで確定だ」

「なんだと！10問に1問は書けたはずだから口にはいつてるはずさ！」

4人（（（やつぱり吉井はバカだな）））

明久「みんなどうして僕をあわれむような目でみるの？」

明久 side out

優璃 side

優璃家にて

時刻20時30分

「ハア・・・（今日の朝、変な人たちに絡まれていた私を助けてくれた人・・・たしか文月学園の制服着てたよね？ならまた会えるかな？）」

葵「どうかしたの？優璃」

「ううん、なんでもないよ！」

葵「それならいいけど」

「それより葵、振り分け試験受けなくてよかつたの？」

葵「いいのいいの、私は演劇ができればどのクラスだつていいし、

麗奈も心配だしね」

葵は笑顔でそう答えた。

麗奈「・・・『めんなさい』

葵「麗奈が謝る」とはないでしょ」「

「そうだよ」

麗奈「・・・でも」

葵「気にしないの、それに和くんもFクラスだから」「え？ 和くんはAクラスのボーダー越えてたはずだけど・・・」

麗奈「・・・和くん寝坊したんだって」

「なにやつてるの和くん・・・」

葵「まさか振り分け試験の日に寝坊するとは・・・」

ピンポーン

「誰かな？」

葵「ちょっとといつてくるね」

和哉「お邪魔します」

葵「噂をすれば・・・だね」

和哉「??」

「寝坊くん、どうしたの？」

和哉「うつー? どうしてそれを」

「葵から聞いた」

和哉「葵さん! どうしてしつてるんですか、今日試験受けてないで

しょー?」

葵「学園にいる知り合いに聞いたんだよ、小学生が振り分け試験に遅れてきたって」

和哉「小学生じゃない!」

「試験の前の日に夜更かしして寝坊するくらいだから説得力ないけどね~」

和哉「・・・(シクシク)」

麗奈「・・・ところで優璃は大丈夫なの?」

「私は多分問題ないとおもうけど」

麗奈「・・・優璃とも一緒にクラスがよかつた」

「来年は同じクラスになれると思つよ、麗奈も頑張つてるし」

麗奈「・・・来年はみんなでAクラス」

葵「そういえば、宗くんと薰ちゃんと蓮くんは？」

麗奈「……薰は問題ないって言つてた」

「宗くんと蓮くんは特例で別の日に振り分け試験受けたらしよ」

麗奈「……あの3人はAクラス確定のはず」

葵「そうだね～」

「そういうば次の登校日つていつだっけ？」

葵「たしか始業式の日だよ」

「そうだったね、はやく学園に行きたいんだけどね（あの人には早く会いたいし）」

葵「そうだね。さてと、それじゃあ麗奈の日本語の勉強でも手伝つよ」

麗奈「……ありがと」

「和くん……いつまで泣いてるの……」

和哉「……僕は小学生じゃない……（シクシク）」

## 第1話&1t；転校生たちと自己紹介&go+；

明久 side

鉄人「遅いぞ！吉井！」

「おはようございます西村先生！」

鉄人「吉井・・・おはようございますじゃないだろう」

「え？ えーっと・・・今日も肌が黒いうえに暑苦しいですね？」

鉄人「お前は遅刻の謝罪より、俺を罵倒する事と肌の色の方が大事なのが？・・・まあ良い、受け取れ」

「掲示板とかに張り出したほうが楽しいですか？」

鉄人「まあそれもそうなんだがな、ウチは試験校として有名だからな色々問題があるんだ」

「へえ～、さて何クラスかなつと（きつと口くらいは・・・）」

もらつた封筒の端を破き、中に入つていた紙をみると。

『吉井 明久・・・Fクラス』

二年Fクラスの前。吉井明久は躊躇していた。

「遅刻なんてして、みんなの印象悪くなつてないかな・・・？」  
「なんて考えすぎだよね！」

軽快に扉を開けて入つた。

「すいません。ちょっと遅れちゃいました」

雄二「早く座れこのウジ虫野郎！」

（・・・へ？）

雄一「聞こえなかつたのか？ああ？」

（それにしてもなんて物言いだろう。いくら教師でも失礼すぎる。）  
僕はにらみつけるように教壇に立つている教師を見た。

「・・・雄一、何やつてんの？」

教壇にいたのは明久の悪友、坂本雄一だつた。

雄二「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がつてみた、なんか転校生がこのクラスに来るらしいぞ」

明久「そうなんだ」

F「――なに――!? 転校生だとおおおお――?」

F「男か!? 女か!?」

雄二「男子一人、女子二人らしいぞ」

F「――女子がくるぞ――!!」

F「――うおおおお――!」

「で、何で雄二が先生の代わりを?」

雄二「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え? それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの?」

雄二「ああ、そうだ」

(雄二さえ説得すればこのクラスは僕の思いどおりに・・・)

雄二「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

(考えることは、同じなんだな)

「それにしてもさすがはFクラス。ひどい設備だね」

Fクラスの面々はみんな床に座っている。椅子なんてものはないらしい。

福原先生「えーと、ちょっと通してもらえますかね?」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貪相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

このクラスの担任だ。

福原先生「それと席についてもらえますか? HRを始めますので」  
僕と雄二がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待つてから壇上でゆっくりと口を開いた。

福原先生「えー、おはよつじやります。一年F組担任の福原慎です。  
よろしくお願ひします。」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。  
チヨークすらまともにないみたいだな。

福原先生「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されますか？不備があれば申し出てください」

F「せんせー、座布団に綿が入つてないです」

福原先生「我慢してください」

F「せんせー、卓袱台の足が折れました」

福原先生「ボンドで直してください」

F「せんせー、窓が割れて隙間風が寒いです」

福原先生「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」

(・・・・・ひどすぎる)

福原先生「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、転校生からやつてもらいましょう。一ノ瀬君、川崎さん、水無月さん、入つてきてください」

福原先生がそう言つと、転校生の3人（小学生の男の娘と長い黒髪を後ろで束ねている女の子とセミロングの金髪の女の子）がFクラスに入つてきた。

福原先生「まず、一ノ瀬君。軽く自己紹介してください。」

和哉「えつと、一ノ瀬 和哉といいます。趣味は絵を描くことです。一年間よろしくお願いします」

F「どこからどうみても小がく・・・ひつ！？」

(な・・・なんだこの殺氣は！？)

和哉「僕は小学生じゃないですので間違えない様にお願いします（ゴガガゴゴ・・・！）」

一ノ瀬君は黒いオーラを出しながらF生徒にそう言つ放つた。

福原先生「つづ次は、川崎さん。自己紹介を。」

葵「川崎 葵です。部活は演劇部に所属する予定です。一年間よろしくお願ひします。」

長い黒髪を後ろで束ねている子がそう言つた。

秀吉「葵殿ではないか！？どうしてここにいるのじや？」

「秀吉の知り合い？」

秀吉「まあ、そんなところじや」

葵「あ、秀吉君もFクラスなんだ？」

秀吉「うむ。しかし葵殿はAクラス確実の成績だったはずじゃが？」

葵「麗奈が心配だったから。振り分け試験受けなかつたんだよ。」

福原先生「えー、雑談は後にしてくれださい。」

葵「あ、すみません」

福原先生「水無月さん、自己紹介を」

麗奈「・・・はい。・・・水無月 麗奈です。・・・・・よろしくお願ひします。」

と、綺麗な金髪の女の子が言った。

F「質問いーですかー？」

麗奈「・・・はい」

F「親が外国人なんですか？」

麗奈「・・・母がイギリス人」

葵「ちなみに最近までイギリスにいたから、少し日本語が苦手だから話すときはゆっくり話してあげてね」

(帰国子女か・・・島田さんと同じで大変なんだろうなあ・・・)

福原先生「次は、廊下側の人から自己紹介をお願いします」

秀吉「木下 秀吉じや。演劇部に所属しておる」

(秀吉、今日もかわいいなあ~)

秀吉「よく間違われるが僕は女子ではなく男子じや・・・」

和哉(木下君も苦労してるんだね・・・)

康太「・・・土屋 康太・・・特技は盜むじやなくて盗す・・・特  
にない」

和哉(・・・聞かなかつたことにしよう)

島田「島田 美波です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。趣味は吉井 明久を殴ることです」

明久「誰だ! そんなピンポイントで危険な趣味を持つてる子は! ?」

和哉・葵((あの子とはあまり関わらないほうが良さそう))

あとは名前をいうだけというのが続き、明久の順番までまわってきた。

「「ホン。え～っと、吉井 明久です。気軽に『ダーリン』と読んでくださいね」

F 「「「「「ダ――ーリンイイイ――ーン――!」」」」

(凄い威力だ・・・吐き気が止まらない)

「・・・失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願ひ致します」

僕が自己紹介を終えると・・・

姫路「あの、遅れて、すみま、せん・・・」

F × 4 1 「え？」

福原先生「ちょうど好かったです。今自己紹介をしてくるといふので、姫路さんもお願ひします」

姫路「は、はい！あの、姫路 瑞希と言います。よろしくお願ひします！」

F 「はいっ！質問です！」

姫路「あ、はいっ。なんですか？」

F 「どうしてここにいるんですか？」

姫路「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまって・・・」

F 「そういうえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

F 「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

F 「俺は弟が事故に遭つたと聞いて、実力を出し切れなくて」

F 「黙れ1人っ子」

F 「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F 「今年一番の大嘘をありがとう」

(僕以外もみんなバカばつかじやないか・・・)

姫路「で、ではっ、今年1年よろしくお願ひします！」

姫路は逃げるように、僕と雄一の間の空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突つ伏してしまう。

「姫路さん、体調はもう大丈夫なの？」

姫路「あ、吉井君。だいぶ良くなりましたよ。」

「そっか、よかつた」

福原先生「はいはい。静かに・・・」

バンバン！・・・バキッ！

教卓が木つ端微塵になつた。

（さすがに酷すぎるよ）

福原先生「え～。代えを持つてきますので、皆さんは自習をしてくださいね」

「・・・ねえ雄一、ちょっと良い?」

雄二「ん?なんだ?」

和哉（おもしろそうだから、盗み聞きしようかな）

雄一を伴い廊下に出た。

姫路「吉井君、どうしたんでしょうか?」

葵「姫路さん、吉井君が気になるの?」

姫路「え?、えっと」

葵「川崎 葵です。姫路さん、ようじくね。」

麗奈「・・・水無月 麗奈」

姫路「い、いぢぢらいそよろしくお願ひします」

廊下にて。

「ねえ雄一、試合戦争を仕掛けでみない?」

雄二「この前学校の設備などはどうでもこいつてこいつてなかつたか?  
?・・・姫路のためか?」

「ち、違うよ!?」

雄二「素直じやねえな。まあどうせ、試合戦争はやるつもりだった。  
世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくて  
な」

和哉（新学期初日から仕掛けるのか・・・ま、とりあえずはエクラ  
ス代表の手腕をみせてもらいますか）

雄二「先生が戻ってきたみたいだし、戻るぞ」

再び教室にて。

福原先生「えーと、坂本君キミが最後ですよ。クラス代表でしたよね？前に出てきてください」

雄二「了解、Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

雄二「コホン。さて、皆に一つ聞きたい。・・・Aクラスは超豪華待遇らしいが・・・不満はないか？」

F×41「大アリじゃあッ！」

雄二「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ！」

F「いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！」

F「Aクラスだつて同じ学費だろ！？」

F「改善を要求する！！」

雄二「そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ！」

## 第2話&1t・Dクラスに宣戦布告へ&go+；

雄一「そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

F「そんなの勝てるわけがないだろ？」

F「これ以上設備が落ちたらどうなるんだ」

F「姫路さんがいたら何もいらない！」

F「麗奈さんがいるだけで僕は満足です！」

雄一「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

F「無理に決まってやるじゃん」

F「そう言われても何の根拠もないしなあ・・・」

雄一「根拠ならあるわ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄一は自信ありげにそう宣言した。

雄一「おい康太、今まで姫路と川崎、水無月のスカートを覗いてるんだ」

3人「えっ！？」

3人は素早くスカートを押さえた。

雄一「土屋 康太 こいつがあの有名な寡黙なる性職者だ」（ハツリーニー）

そういうと康太は首を横に振った。

F「馬鹿な・・・奴がそうだというのか？」

F「見ろ！まだ証拠を隠そうとしているぞ・・・」

F「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

雄一「それに姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

姫路「え？私ですか？」

（姫路さんは学年トップ5に入っているほどの学力だからね～）

雄一「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

F「そうだー俺達には姫路さんがいる！」

F「彼女ならAクラスにも引けをとらない！」

雄二「それに木下 秀吉だつている」

秀吉「ワシもか？」

F「演劇部のホープ！」

F「確かにAクラスに木下 優子つていう姉がいただろ」

雄二「そのほかにも島田もいる」

島田「えつウチ？」

雄二「島田は数学だけならAクラスにも匹敵する。当然俺も全力を尽くす」

F「坂本つて小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだり」

F「確かになんかやれそうな気がしてきたぞ」

F「これはいけるんじゃないか！？」

F「よし…やつてやろううじやねーか！…」

教室の士気が高まつていつたが…

雄二「それに吉井 明久だつている」

シーン・・・

F「誰だよその吉井 明久つて」

「雄二。何でそこで僕の名前をだすのさ…？せつかく上がった士気が台無しじゃないか！」

雄二「そうか、知らないのなら教えてやる。ここにこの肩書きは『観察処分者』だ！！」

F「確かに観察処分者つて『馬鹿の代名詞』じゃなかつたつけ？」

「ちつ違うよ…！ちょっとお茶目な16歳の愛称で…」

雄二「そうだ『馬鹿の代名詞』だ」

「肯定するなバカ雄二…！」

姫路「あのそれってどういうものなんですか？」

雄二「観察処分者つていうのは具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかの雑用を特例として物に触れるようになつた召喚獣でこなすんだ」

姫路「それって凄いですね！試験召喚獣つて見た目と違つて力持ち

「らしいです」

姫路さんが僕に期待の眼差しを向けている。

「あはは。そんな大したものじゃないよ。確かに僕なんかの点数でも召喚獣の力はかなり強いけど、その時受ける召喚獣の負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ。皆と同じで教師の監視下でしか呼び出せないし、僕にメリットもないしね」

「おしおし……しゃあ召喚かやられた。本人も苦しめて事

「事じやん」

雄一「気にするな！明久はいてもいなくとも大して変わらん雑魚だ」  
「……雄一そーは僕をフオコリするところよなー

葵「坂本君、さすがに酷すぎない?」

川嶋さん・・・

「葵さん……あつがと」

雄一「まずは俺達の力の証明としてまずDクラスを制圧しようと思う。皆この境遇に大大に不満だろ？」「

「…当然だ!!」

姫路さんも恥ずかしげに手をあげていた。

「ねえ雄一今字が間違つてなかつた? それに下位勢力の使者つ

「ここに遭つたよ？」

雄二「大丈夫だ。騙されたと思って行つて来い」

麗奈「……私モ」

「えっ？ 一ノ瀬君に水無月さん、いいの？」

和哉「和哉でいいですよ」

麗奈「・・・麗奈でいい」

「なら」いつも明久でいいよ。それじゃあ行こうか、和哉君に麗奈

ちゃん「

和哉・麗奈「（・・・）はい」

こうして3人でDクラスに向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1068z/>

---

バカと天才？たちと召喚獣

2011年12月5日22時47分発行